

コンドウアキ

JOSHIBI no.196





街で人気のパン屋さんの ような存在になりたい。

日本中で愛されるキャラクター

「リラックマ」の生みの親、コンドウアキさん。

グッズ制作や出版などでの多彩な活躍を支えるのは、
しなやかで自然体な人柄でした。

Photo 西 将隆 Text 株式会社フリッジ

小さい頃からかわいい絵柄が添えられた文房具が大好きでした。いつもノートや鉛筆、ティッシュを探しに文具店に足を運んだものです。絵を描くのも好きでした。写実的な絵は描きませんが、シンプルな線の漫画や文具のキャラクターをまねっとして描いたものです。小学校5年生か6年生の頃だったでしょうか。授業で「将来何になりたいか」を書く機会があつて、「ノートの表紙に絵を描く人って何ていうんですか？」と先生に尋ねると、「イラストレーターだよ」と教えてもらったのです。将来私になりたいのはこれだ。そう思つて「イラストレーター」と書いて提出しました。当時この出来事は、すぐに忘れてしまいましたが、人生の節目ごとに思い出すこととなります。

最初の節目となつたのが、高校3年のときです。中学・高校の頃はイラストを描くことは全くなかつたばかりか、イラストレーターになる夢さえ忘れていました。なのに進路選択の時期に「そういえば小学生の頃、将来の夢にイラストレーターと書いたなあ」と思い出したのです。美術の先生に相談すると、美大への進学を勧められました。取り組みたいことのイメージに一番近かつたのが、女子美のデザイン科です。在学中は、イラストはもちろん、写真や彫塑、陶芸をはじめ、さまざまなことを学びました。一線で活躍するデザイナーが授業で登壇したこともあります。「ひとつの制作物にも、こんなに大勢のプロフェッショナルたちが携わっているんだ」と新鮮な驚きがあつたものです。友人たちが熱心に創作活動に励む姿を見て「みんな器用だな」「そんなことまでやるんだ」と感心するのも日常茶飯事。私は粘土も上手に扱えなければ、写真でもピンぼけのカットを量

コンドウアキ

イラストレーター、キャラクターデザイナー。女子美術大学短期大学部造形学科情報デザイン専攻卒業。サンエックス株式会社に入社し、「みかんぼうや」や「リラックマ」などのヒット作品を生み出す。2003年に独立し、フリーランスで活動。「うさぎのモフィ」や「ウーとワー」のキャラクター制作、商品デザインのほか、絵本や漫画の執筆など活躍のフィールドを広げている。女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域特別招聘教授としてキャラクターデザインの指導も行う。



産する始末で、それらが自分に向いていないことを悟りました。消去法で自然に辿り着いた分野は、結局イラストだったんですね。今振り返ると、さまざまなフィールドに飛び込んで「不向きな分野を知る」ことも、貴重な経験でした。最初から選択肢を狭めると、新たな出会いのチャンス逃しかねません。「自分はこの分野でなければだめ」と固執せず、いろいろなことを試すうちに、自ずと選択肢は絞られていくものです。

卒業の時期が近づき、就職先を考え始めると、またも「イラストレーターになる」という小学生の頃の夢が頭をよぎります。社会に出て生活する上では、一定の収入が欠かせません。苦にならずに続けられて収入に結びつきやすいことを仕事に選ぶのも、有効な考え方ではないかと思います。そこで注目したのは「好きなこと」と「得意なこと」が重なる分野です。私にとってはイラストを描く仕事でした。就職課に相談したところサンエックスを紹介されて、ラッキーなことに入社するに至ります。

就職すると、グッズを作る「アイテム班」に配属されました。当時は商品だけでなくディスプレイ、バーコードシール、ポップなど、関連するあらゆる制作物に携わったものです。ほかだと、ギフトショーへの搬入に立ち合ったことも。これら新たな仕事にもまったく抵抗はありませんでした。大学時代にいろいろな分野に触れる楽しさを知っていたからかもしれません。この会社の月例会議も、印象に残っています。これは自身が考案したキャラク

ターをプレゼンテーションする場です。ここで認められたキャラクターが世に送り出されます。先輩たちはみんなデザインが上手で、刺激のある濃い日々でした。入社したばかりの頃は、キャラクターといえば月替わりのテーマに沿ってデザインされる単発的なものが主でしたが、キャラクターがひとつの商品で使われるのではなく、さまざまなアイテムやメディアで使われる存在に変わっていったのは、この会社で「たればんだ」が生まれた頃です。社員総出でひとつのキャラクターのグッズ展開を分担して進める機会が増えました。キャラクターを取り巻く世界は大きく変化しつつありました。同時に、入社当初は純粹に見た目がかわいいデザインに人気があったのが、徐々に個性的なキャラクターの人気が高まっていったことも印象的な変化のひとつです。

私自身にとって最初のヒット作品となったのは「みかんぼうや」です。これは入社4年目の2001年に、月例会議で食べ物テーマとして取り上げられた際に考案したものです。実のところ、当時は人気キャラクターを生み出した自覚はありませんでしたが、仕事が急に忙しくなったことはよく覚えています。その後も引き続き、月例会議のノルマに尻を叩かれながらキャラクターのアイデアを出し続けました。リラクマを閃いたのは、みかんぼうやを手掛けてから2年が経った頃です。私にしては珍しく「これはいける気がするから商品化を検討してほしい」と立案部署の先輩に相談したほど、このキャラクターに



ウーとワー



明るく活発なウー（白）と、慎重派でさびしがりやのワー（黒）からなる謎の生き物コンビ。
2019年に株式会社WOWOWのコーポレートキャラクターに就任した。

描く楽しさも知りました。今はキャラクターデザインと並んで、絵本の仕事にもバランス良く取り組んでいる実感ががあります。

といいながら私は、自らの内なる原動力をもって描き続けられるアーティスト気質な人に憧れがあります。「常に創作をせずにはいられない」という人って格好良いじゃないですか。自分もそうなりたかった。私は締め切りに迫られなければ筆が動かないタイプ。でもいただいた縁を大切に、与えられた役目に全力を尽くすのもいいものだと思います。クライアントが何を意図しているのか、何を求めているか。これらをつかりと汲み取ること。制作のスタートラインはここにあります。アーティストではなくデザイナーなんだという思いが常にあるんだと思います。

自分が制作に携わった絵本やキャラクターグッズを手にしたお客さんから、前向きな感想をいただくことがあるのもこの仕事の良さです。これから誰かの気持ちに少しでも豊かになるような仕事をしていきたい。喻えるなら街で人気のパン屋さんみたいな存在でしょうか。開店前から焼きたてのパンを楽しみに列をつつてくれるお客さんがいるなんて幸せじゃないですか。同じように、私が描くキャラクターを心待ちにしてくれる人がいるとしたら、本当にデザイナー冥利に尽きますね。

うさぎのモフィ



小さなうさぎの女の子。好奇心旺盛で、ふわふわのしっぽがチャームポイント。
子ども向けの絵本やWebコミック、コマ撮りアニメなどで幅広く展開されている。

は可能性を感じました。幸運なことに、大勢の方々から愛されるキャラとなり、私の代表作のひとつになっています。このクマのおかげで、独立後もさまざまな会社の方と多くのお仕事を二緒する機会に恵まれました。

キャラクターを作る上でいつも心に留めているのは、主役はキャラクターではなく手に取ってくださるお客さんということです。だから「こう見てほしい」「こう扱うべき」といった主張はできるだけ削ぎ落とし、人に寄り添い、暮らしに溶け込むデザインを心がけます。憧れのデザイナーはディックブルーナさん。さまざまなキャラクターが溢れている現代では、要素を削ぎ落とし過ぎると既存の何かに似てしまうのが悩ましいところですが、願わくば私もシンプルで長く愛されるキャラクターを生み出していきたいと思っています。

周年記念のキャラクター「うさぎのモフィ」を手掛けたことも、私のキャリアを語る上で欠かせない経験です。これもグッズの制作から、絵本やコマ漫画、コマ撮りアニメの制作へと広がったキャラクターのひとつでした。当初の私は、作話に不慣れでしたが、クライアントのリクエストに必死で応えるうちに、ストーリーを生み出す鍛錬になっていたのかもしれない。気づけば、今ではキャラクターデザインと同じくらい絵本の制作も手がけています。絵本の仕事をするなかでは、水彩で



平面から3Dの世界へ。 「役に立ちたい」という思いが成長の力に。

高橋 香さん
芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻 2020年3月卒業

40年以上の歴史を持つ、日本を代表するゲーム会社「カプコン」。その大阪本社で、デザイナーとしてコンシューマーゲームやスマホゲームで3Dモデリングを担っている高橋香さん。入社して3年。大学時代にはあまり触れることがなかったという3Dアニメーションの現場で奮闘する高橋さんに、カプコンでのお仕事のこと、そして大学時代のことなどを伺いました。



株式会社カプコン

「ストリートファイター」「モンスターハンター」「バイオハザード」各シリーズをはじめ、数々の人気タイトルを送り出す国内屈指のゲームソフトメーカー。2023年は、シリーズ最新作となる『STREET FIGHTER 6（ストリートファイター 6）』が発売を控えている。 <https://www.capcom.co.jp>

『STREET FIGHTER 6』PlayStation®5、PlayStation®4、Xbox Series X|S、Steamにて
2023年発売予定 ©CAPCOM CO., LTD. ALL RIGHTS RESERVED.

ストーリーのある作品作りが
好きでゲーム業界へ

大学時代はヴィジュアルデザイン専攻で平面の絵やアニメーションの作品を主に制作していました。アニメーションといっても、一枚一枚描きで描いていくようなアナログな作品。アグレッシブなものよりは静かな雰囲気が好きで、卒業制作では「雨」をテーマに映像と立体を組み合わせたインスタレーション作品を作りました。これもとてもアナログな作業が中心でした。だから、今の仕事と大学での学びがリンクしているか？というところ、全然そんなことはありません。

そんな自分が、働くならゲーム業界という意識を持ち始めたのは、作品制作をするなかで、絵でもアニメーションでも、「ストーリー」が先にあるものが好きということに気がついてからです。しかもゲームは、映画やアニメとは違って自分で操作する媒体です。主人公になりきって、一人称の体験ができるのはゲームならではの楽しみです。

はじめは
記念受験のようなつもりで。

就職活動ではゲーム業界に絞っていろいろな会社を受けましたし、インターンにも行きました。でも、正直にいうと、カプコンに関しては記念受験みたいなつもりでした。モンハン（モンスターハンター）は好きでし



就職活動はしんどい。
だからこそ自分にやさしく。

す。そしてまた、3D初心者の私を支えて、育ててくれる周りの先輩方の優しさも「役に立ちたい」「恩返ししたい」という気持ちの素になっていきます。カプコンって、私の知る限りでは優しい人たちが溢れている社風なのです。

私自身、もともと内向的な性格というのもあり、人前で話す機会の多い就職活動はともしんどいものでした。ただ、そういったメンタルは面接でも伝わってしまうようで、それで落ちてしまった経験もあります。カプコンがなぜ受け入れてくれたのか今でもよくわかりませんが、「せっか

お金をかけて大阪まできたのだから、話せるだけ話そう」そんな精神状態で挑んだ面接は、私自身も心地よい時間だったと感じています。就職活動はお世辞にも楽しいものではありませんが、しんどいなと感じる時には、自分の好きなことをして、少しでも安らかな心になってほしいです。就活のあとは楽しい卒業制作が待っています。

たが、大きな会社だし、一応ダメ元で受けておこうかな……という程度で書類選考にポートフォリオを送ってみたんです。それが通って1次面接、そして最終の2次面接へ。面接では極度の緊張で話したことをほとんど覚えていません（笑）。ただ、ひとつだけ印象的だったことがあります。就活を通じていろいろな会社の面接で「御社で作られているゲームは、商品ですか？ それとも作品ですか？」という内容の逆質問をするのに対していたのですが、どの会社の方も即答で「商品です」と答えていらしたなかで、カプコンの方だけが「商品かもしれないけど、その中で自分たちのやりたいことがやれたら一番幸せだね」っておっしゃっていたんです。個人的な意見だったのかもしれないませんが、あなたが味を感じましたし、素敵な言葉だなと印象に残りました。その方のお名前もお顔も、緊張していて覚えていないのですが……（笑）。

自己完結型の制作から チームの仕事へ

大学時代は平面系の専攻でしたから、入社前はいわゆる「2D系の仕事を担当することになるのかな？」と勝手に想像していました。けれど、いざ入社してみると最初の研修から3Dという未

知の世界が広がっていました。初めて「Maya」(Autodesk社の3DCGソフト)に触れ、先輩方の後押しで少しずつステップアップを重ねながら、必死で吸収する日々。まだまだひよっこではありますが、現在は2023年に発売予定の『STREET FIGHTER 6』で、プレイヤーキャラの着せ替え衣装の3Dモデルを作る仕事を担当しています。3Dモデラーというのは、デザイナーが作った衣装やキャラクターを3D化するという仕事です。大学時代は、自己完結で作品を作っていました。会社ではどんな仕事もチームで取り組んでいます。たとえば先日「巾着袋」を作ったのですが、ゲームの中では本当にワンシーンだけにしか出てこない小物ですが、3つくらいはセクションの担当者が集まって、「この紐を動かすにはどんな仕組みが必要か？」というようなやりとりを延々と行いました。小さな小物一つでも、デザイナーがいて、私のような3Dモデラーがいて、それを動かすモーショングラフナーがいて、ゲームの中に落とし込むプログラマーがいる。それぞれに異なる視点、技術を持つ人との仕事は刺激的であり、尊敬の気持ちを大切にしています。まだまだ目の前のことで精一杯な自分ですが、そういうなかで少しずつできることの幅を広げ、「役に立って」と実感できる時が、今の私にとっての喜びで

採用担当者の声

「おもしろい」「やりたい」と感じるモチベーションがすべての原動力です！



「ゲーム」というコンテンツは、映像・ストーリー・世界観・音楽・インタラクティブな操作性など、プロフェッショナルなクリエイターが創造するメディア芸術作品です。このようなクリエイティビティの高い作品を作る際にカプコンで最も重要視しているポイントは、社員が「おもしろい」「やりたい」と感じる気持ちです。なぜならば、自分たちがやりたいことに楽しんで取り組むことが、納期や売上目標などの厳しいハードルを乗り越えるための原動力となるからです。このモチベーションこそが、カプコンが世界中のユーザーに支持されるゲームタイトルを発信できる原動力です。ぜひあなたの持っている「おもしろい」「やりたい」のモチベーションを、カプコンで発揮してください。

Q 5

大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。

自分への反省も含めて思うことは、人前でも落ち着いて説明やプレゼンができるようになっていたらよかったなということです。話すことは、今後の美術家としての人生で大切な仕事の一つでもあります。そして、とにかくあらゆる分野のさまざまな年齢の方々と出逢い、交流することに価値があるのではないのでしょうか。その出逢いから人生は自由に、無限に広がってゆくと思います。

Q 6

海外で活動をするの楽しさを教えてください。

日本では観客が作家本人に対してネガティブな意見を言うことはまずないと思いますが、フランスではあっさりと思気なく伝えてくれるので(笑)、その意見を聞けることは興味深く貴重な時間です。また、展示会場となる現場での作品設営を数日かけて行う際には、各地から来たアーティストたちと同じ時間を過ごしますが、女子美で仲間と共に展示をしたことなどが思い出されて楽しい気持ちになります。皆別々の作業をしながら一つの空間を作り上げる、近すぎず遠すぎない距離感がとても心地よいです。

Q 7

やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

やりたいことや夢があるだけで素晴らしいことだと思います。しかし、それが本当に心の底から望んでいることなのかを自分自身にしっかりと問うてみてください。そうであればあとは努力のみではないでしょうか。継続は力なりと言いますが、環境の変化にも負けず、諦めずにこつこつと努力を重ねていけば、いつかは必ず辿り着けると思います。そして他者と比べず、自分との戦いと覚悟し、意思を強く貫き続けてください。

Q 8

後輩(女子美生)に一言メッセージをお願いします。

時間のある在学中に、自分は何が秀でているのか、特異な才能は何なのかを見つけることができると卒業後の方向性を定めやすいと思います。それは授業中のとても些細な作業から見つけられるかもしれません。手の感触や心の動きに敏感になって、自分を観察し、隠れている心の声に耳をすまして過ごしてみると、きっと何か新たな発見があると思います。



『Volte (自転／輪乗り) #8』
種子と馬の毛を用い、生命の強靱性と脆弱性を描いたドローイング／53×53cm／2018



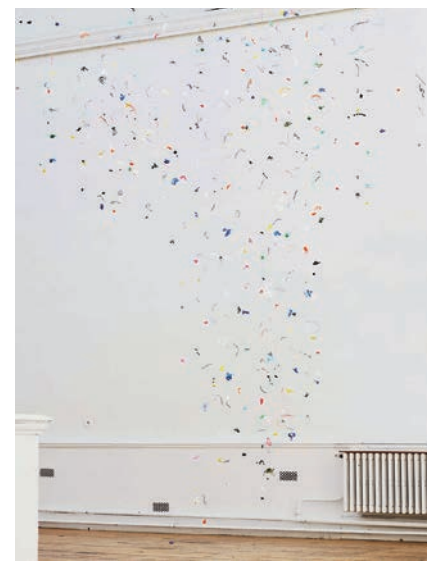
『Épaves (残骸／漂流物)』
マイクロプラスチックの海洋汚染がテーマのインスタレーション／
約400×500×300 cm／
アヴィニョン現代アートフェスティバル展示風景／2020



井上 織衣 (いのうえ・おりえ)
美術家。2008年女子美術大学大学院ファッション造形研究領域修了。2011年女子美パリ賞受賞。無限小から無限大の不可視の存在やエネルギーの可視化を試み、人と自然環境の関わりを問うドローイング、立体、インスタレーションを制作。近年の展覧会に『アントロポセン：分岐点を越えた景色』(茨城県つくば美術館／2022年)、『Essere Ecosophia』(ミラノ／2021年)、『現代アートフェスティバル：Parcours de l'Art』(アヴィニョン／2020年)。2020年フランスのCNAP (国立造形芸術センター) 助成、DRAC (地域文化行政局) 助成を受け、2021年パリ近郊のカシャン市のビエンナーレにて第2位審査員賞受賞。2024年に同市の文化展示スペース L'Orangerieにて大規模な個展を開催予定。
Website : orieinoue.com Instagram : @orie.inoue

井上 織衣

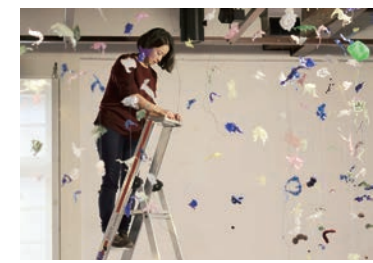
FRANCE



『Éclats (飛び散る破片／突然の爆音)』
地球に溜まったプラスチックが一気に上空へ吐き出されたかのような
インスタレーション／約500×400×400cm／
カシャン・ビエンナーレ展示風景／2021



『Gemmae (宝石／松脂) #1 (部分)』
絶え間なく続く生命の芽生えと
循環を表した紙の立体／
15×15×15cm／2020



4日間に及んだアヴィニョン現代アートフェスティバルの作品設営

Q 1

海外で活動するようになったきっかけは？

高校時代にフランスの美術館や名所を訪ねる研修旅行を経験し、そこで初めてパリに触れました。大学在学中には第二外国語としてフランス語を専攻し、田桐正彦教授のおかげで文法の基礎が身についたと思います。そしていつしかフランスで生活してみたいと漠然と思うようになり、のちに「大村文子基金 女子美パリ賞(※)」が私をフランスへ導いてくれました。一年の滞在で帰国する予定でしたが、フランスでの生き方や国民性が肌に合っていたため、今ではこの国に住むべくして来たような気がしています。

※本学卒業生・大学院生を本学が契約しているパリ国際芸術都市のアトリエに研究員として1年間派遣し、未来への可能性を期待できる国際的なアーティスト・デザイナー・研究者の育成を図ることを目的とした賞。

Q 2

女子美時代は、どんな学生でしたか？

入学早々に他校の友人たちと自主制作映画を撮る企画を企て、ロケ現場探しか衣装製作、出演にまで携わり、正直突っ走りすぎていました。その反動から授業に対しては不真面目で、先生方に迷惑をかけてしまいました。しかし次第に自身を見つめ直し、律することで、自分なりの世界観を創り上げることができたと思います。プレゼンや作品説明など、人前で言葉で伝えることが非常に苦手でしたので、その分作品に力を込めていたような気がします。

Q 3

女子美時代の印象深い思い出を教えてください。

友人たちと美術集団なるものを結成し、常に美術を追求し、真理とは何かを探っていたことです。その友人の一人が映画に詳しく、彼女の勧めで、授業後にはほぼ毎日のように女子美の図書館の視聴覚室に入り浸り、ヌーヴェルヴァーグをはじめとするフランス映画、日本や各国の名作を鑑賞していました。また、あらゆる分野の音楽を聴いたり、演劇なども率先して観に行ったりして思い切り文化に浸り、とにかく時間の許す限り吸収したいという野心がありました。おのずと哲学へも興味が広がり、他校の人間哲学専攻の学生たちとも交流がありました。

Q 4

制作する上で大切にしていることを教えてください。

ふと心に芽生える詩情や驚歎の気持ちを温めて、それをどう作品に落とし込めるかを考えています。独自の視点や感覚で世界をとらえ、その見え方や感性をいかに人々に伝え、共有することができるのが、美術家の仕事だと私は思います。加えて、在学当時パフォーマンスの授業を担当されていた喜多尾浩代助教授のおかげで、制作している時の身体がどう知覚しているのかも深く意識を向けられるようになり、内なる感覚を常に大切にしています。

葦崎大村美術館開館15周年記念 「女性画家のやまなみ」 館長大村智博士によるトークイベントレポート

ノーベル生理学・医学賞受賞者で、本学の名誉理事長である大村智先生が館長を務める「葦崎大村美術館」（山梨県葦崎市）が、2022年に開館15周年を迎えました。その記念企画展「女性画家のやまなみ」の一環として、去る11月3日（木・祝）に大村先生によるトークイベントが行われました。同館が収蔵する女性作家の作品や作家たちとの交流のエピソードなど、貴重なお話が盛りだくさんだったトークの模様をご紹介します。

大村先生の生まれ故郷・山梨県葦崎市にある「葦崎大村美術館」。葦崎市の名誉市民であり美術を愛する大村先生の私設美術館として2007年に開館し、翌年に葦崎市に寄贈されました。開館15周年記念として開催された企画展「女性画家のやまなみ」では、同美術館が収蔵している近現代の女性作家の作品から厳選した約50点が紹介されました。ちなみに、美術館がある葦崎市は南アルプスの山々に囲まれ、八ヶ岳と富士山を臨むことができる美しい景観に恵まれています。そんな景色にもびつたりの「やまなみ」という展覧会名は、「まるで山が連なっているかのように印象付ける展覧会に」と大村先生が自ら命名されたそうです。

「富士山が見えて、茅ヶ岳、八ヶ岳も見えて。こんな日は滅多にないですね。これはひとえに、皆さんの行いもいいですが……私のお陰です（笑）」
午前10時半。和やかな笑いに包まれながら始まった大村先生のトーク。初めは大村先生と美術との関わりのきっかけについてのお話です。
「母親は小学校の先生だったのですが、私が小さな頃からミレーの絵などをカレンダーから切り出して壁に貼ってくれていました。その影響からか、中学の頃から私自身も同じようなことをやっていた。この螢雪寮の敷地内にある蔵の二階奥は、かつては私の勉強部屋でしたが、その窓から茅ヶ岳が綺麗に見えるのでよくスケッチしていました」

「一方、高校から大学にかけてはスポーツに明け暮れ、美術から遠ざかっていたという大村先生。再び絵に関わるようになったのは、北里大学で助教授をしていた頃だそうです。
「その時の教授がすごく絵が好きで、画商さんが研究室にいろんな絵を持ち込んでいました。教授が懇意にしていたこの画商さんとも親しくなり、買えとは言われなかつたんだけど、一度は買わないと申し訳ない。それで最初に買ったのが、野田九浦の『芭蕉』でした。懐は豊かではなかつたから、月賦です。実は当時、野田九浦のことは知らなかつたんですが、この絵はいいなと。研究発表や教授会の前など、心を静めたい時にはこの絵の前に座ってじっと見る。すると芭蕉と同じような気持ちになれて、落ち着くんです。この絵はまだ葦崎市には寄贈していない個人のものです。大事にしています」

「かけになったという岡本彌壽子の『暁の祈り』についても話が及びます。
「初めて『暁の祈り』を観た時に、女性じゃなきゃこの絵は描けないなと思ったんです。そこから、女子美の理事長として女性画家を顕彰するということをやってみてもいいのではないかと、女性の絵を集め始めました。先日、日経に『ジェンダーフリー遠い美術界 女性作家の評価は道半ば』（木原まゆみさん）という記事が掲載されていましたが、私は四半世紀前にジェンダーフリーを始めていたことになりました」
また、大村先生が率いる北里研究所メディアカルセンターは、本格的なヒーリングアートの先駆けとしても知られていますが、取り組みのきっかけとして紹介されたローマ時代の名言「芸術は自然と共に一体となって人間を健全に導く」も印象的でした。



館長大村智博士によるトーク（11月3日）



「女性画家のやまなみ」（9月3日～11月27日）



螢雪寮

そして話題は企画展の作品へ。一つひとつ、作品に出会った経緯や、交流のあった画家とのエピソードが語られました。そのなかには、女子美とも縁の深い錚々たる女性画家たちも登場しました。

「女子美が100周年を迎える時に、縁があつて理事長に就任しました。当時まだ女子美には美術館がなかつたので、100周年の記念に美術館を作ることにしたんです。そこで、たくさんの寄付をいただきましたので、その返礼に『徳の華』という画集を用意することにした。第一線で活躍している卒業生を10人集めた特別な画集です。片岡球子、大久保婦久子、三岸節子、郷倉和子、丸木俊、荘司福、堀文子、多田美波、月館れい、佐野ぬい。……なかでも交渉が難航しそ

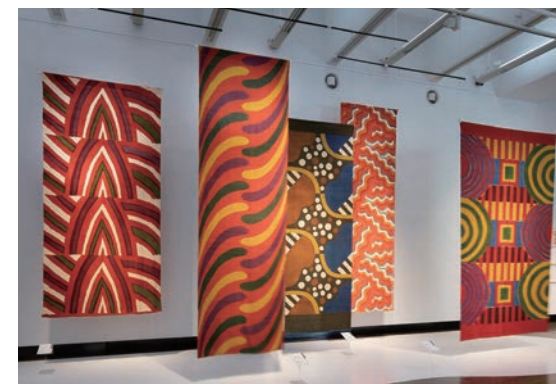
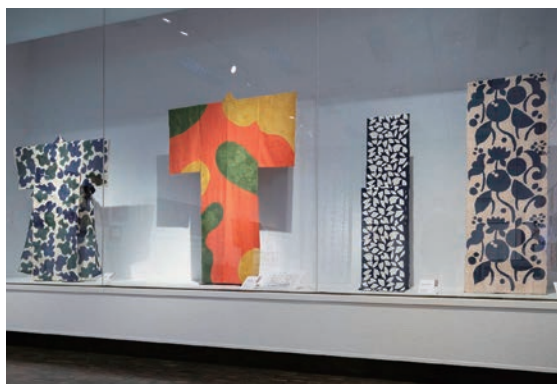
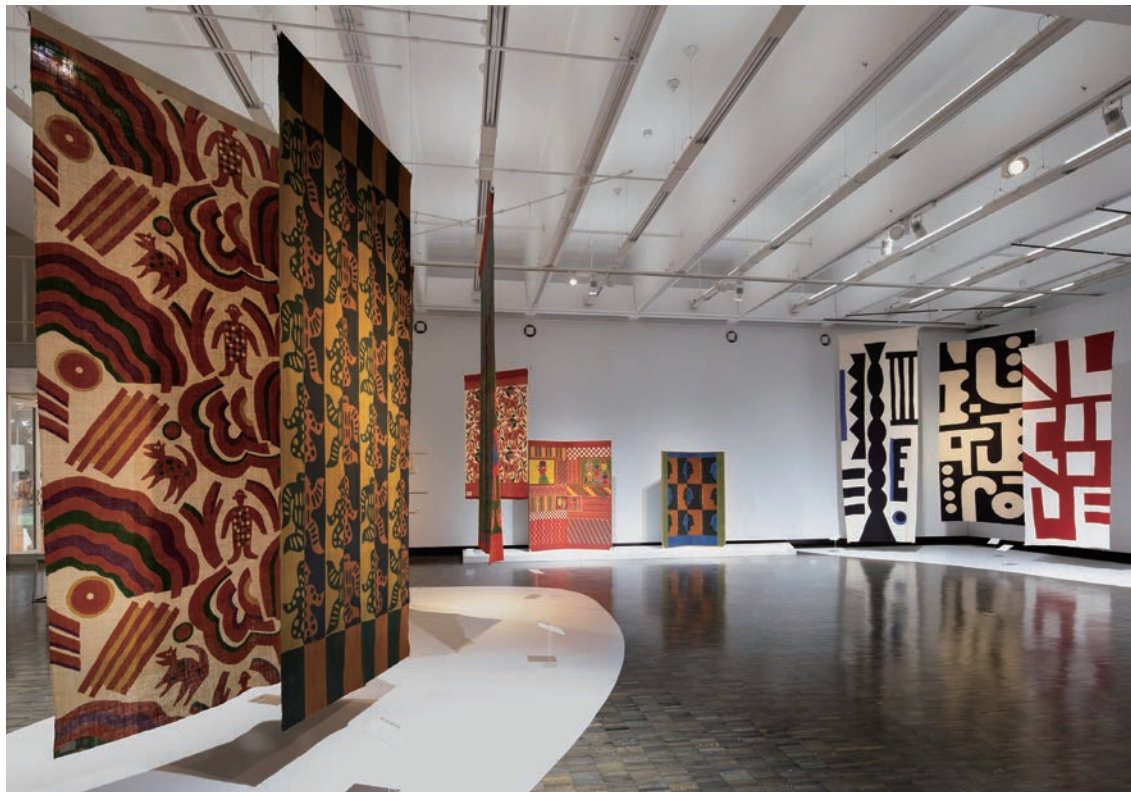
だったのが堀先生。非常に真つ直ぐで、自分の考えを貫く方。おだてにも乗らないし、「見怖そうな感じも受けます。けれども堀先生に加わってもらえないことには、画集は完成しません。そこで、私が交渉を担当することになり、築地の料亭にお誘いして説得しました。嬉しいことにこれ以来、堀先生との交流が始まりました。お酒をいただきますいろいろな話をしましたが、すごく好奇心旺盛な方で、興味を持つとすぐに「自分もやりたい！」とおっしゃるんです。北里大学で微生物を見てそれを絵に描いたりもされました」
さらに、片岡球子先生の「努力の人」の一面がよくわかるエピソードも。
「片岡先生が95歳になった時に横浜美術館で行われた『熱き挑戦―片岡球子の

全像展』。そのオープニングでの忘れられない言葉があります。『初めはいろんな山を描いていたけれど、最後は富士山になった。ところが富士山の深さ等々、どうしても描けない。富士山に褒められる絵を描けるように努力していきたい』と。95歳ですよ。真骨頂ですよ。ほかに、75歳で裸婦を描いた時には『まだ高校生並みだ。あと20年すれば少しはまともな裸婦を描けるだろう』と。さらにいずれ雪舟を描いてみたいと70歳から墨絵の勉強をし、20年経って墨絵の雪舟『面構（雪舟）』を描いてもいます。とにかく努力、努力の方でした」

非常に懇意にされていたという多田美波先生のことなど、さまざまな作家の逸話が語られ、約1時間にわたるトークの最後は、こんな言葉で締めくくられました。
「美しいものを見て、美しいと思えるあなたの心が美しい。（相田みつを）」
「この言葉をお送りして、この場を終わりたいと思います。また、葦崎大村美術館は女性作家200名あまりを収蔵しています。ここに収蔵されることを目標にしてもえらような美術館となること、私の願いです」
ノンストップで語られた大村先生の貴重なトーク。終了後は、観覧者の皆さんと記念撮影をしたりサインをしたりと、気さくで温かな大村先生の人柄を垣間見ることができました。

「柚木沙弥郎の100年－創造の軌跡－」展 女子美アートミュージアムにて開催

相模原キャンパス女子美アートミュージアム(JAM)にて「柚木沙弥郎の100年－創造の軌跡－」展が開催されました。本学元学長で名誉教授の柚木沙弥郎先生は、染色家、デザイナー、アーティストとしてマルチに活躍されています。本展は、2020年度から女子美術大学重点戦略予算の助成を受け、名誉教授の渡邊三奈子先生が中心となり手がけた調査研究報告を基に、工芸専攻の卒業生であるゲストキュレーター柚木沙弥郎の創作に焦点をあてた展覧会でした。独創的で豊かな色彩による型染めや注染の作品70点余りと、企業との共同開発の活動記録や、アトリエ再現などが展示。特に、女子美工芸科の草創期から、当時女子美の教員だった芹沢銈介、柳悦孝とともに染織教育の基礎を創りあげた柚木沙弥郎の「教育者」としての一面が紹介され、大学美術館ならではの特色ある内容となりました。さらに映像コーナーではインタビューの問いかけに対し、明晰な思考で丁寧なこたえる「柚木の言葉」に、モノづくりやクリエイターとして美術やデザイン・工芸にたずさわる様々な方から、感銘や共感のメッセージがたくさん寄せられました。台風の影響で臨時休館となる日もありましたが、全国から同窓生や大勢の柚木ファンが相模原キャンパスのJAMを訪れ、大盛況のうちに会期を終えました。柚木先生は展覧会最終日の2022年10月17日で100歳の誕生日を迎え、現在でも日々制作に向き合い、さらなる躍動を続けています。



撮影：末正 真礼生

アートの役目は、「生きる意味」を問い直すこと。

特別インタビュー 眞田岳彦



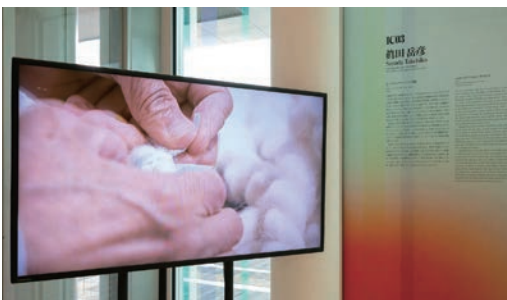
眞田岳彦（さなだ・たけひこ）

1962年東京都生まれ。女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域教授。画家の父に幼少期から美術を習い、ISSEY MIYAKEで衣服デザインを学ぶ。20代から世界数10カ国を旅し、30歳で北極圏グリーンランドに滞在。ロンドンでの彫刻家Richard DEACONの助手を経て独立。帰国後は各地で日本衣服・繊維文化再考プロジェクトを開催。国立民族学博物館外来研究員（2011～13年）。衣服・繊維による造形活動で国内外の展覧会に出品、企業や団体へのアート・デザインディレクションを行う。

1本1本で太さの異なる糸。樹木のように高く広がったフォルム。ウールで形づくられた作品「白維（はくい）」で表現したかったのは「生きる力」です。ガラス張りの展示空間に夕日が差し込むと、真つ白な立体に陰影が浮かび上がります。そこでこぼことした表情からは人間らしい息吹が感じられるのではないのでしょうか。本作品は、愛知県内の6地域、7つの美術館・博物館で、約300名の参加者とともにウールで縄を綯った「あいちNAU（綯う）プロジェクト」の結晶になります。このプロジェクトは国際芸術祭「あいち2022」の企画のひとつで、この芸術祭を貫くテーマは「STILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから」。私自身も制作を通じて「生きる意味」を探求してきました。愛知に生きる人々の豊かさとは土壌に深く関わっていると捉えています。東海湖時代の土壌に、縄文海進による土砂の堆積が繰り返されてきたこの地で、桑や綿が栽培され、繊維文化が育まれました。

愛知県内には、一宮、豊橋、豊田、安城、瀬戸、知多をはじめ、各地域に特徴ある繊維文化があります。そこで県内6市にある7つの美術館・博物館と連携し、地元の専門家たちから参加者向けに、繊維文化や歴史に関するレクチャーをしていただきました。たとえば一宮にある三岸節子記念美術館で

Text 株式会社フリマッジ Photo 渡辺二城

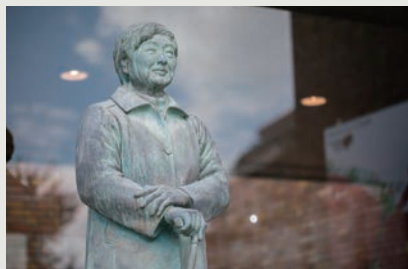


各地でのワークショップの様子
提供:国際芸術祭「あいち」組織委員会

した。物や事を作り出すこと、人とつながることは、人間の根源的な欲求です。だからこそ笑顔になるのでしょう。最終的に、県内各地の参加者とともに綯ったウールの縄は約300本になりました。これらを私が昇華したのが「白維」になります。

私は、仕事として衣服に携わってきましたが、いわゆるファッションデザイナーではありませんし、ファインアートのテイストでもありません。アートとデザインの両領域で表現活動する者として「衣服造形家」を名乗って、一本の紐をはじめ、衣服の構成要素を使って表現したものを衣服造形と考えてきました。今回の作品も衣服として捉えているからこそ、衣服と同じように空間に包まれ、皮膚を通したり鑑賞したりしてほしかった。会場にいた観客のみなさんに「ぜひ触ってみてください」「匂いを嗅いでみてください」と促していたのはそのためです。

今回の展示で嬉しかったのは、ワークショップでウールを綯った参加者が



機業で栄えた街の一角に佇む 一宮市三岸節子記念美術館



三岸節子は尾西市（現・一宮市）の機業を営む家庭に育ち、女子美術学校（現：女子美術大学）を卒業後、洋画制作に励みました。尾西市の名誉市民に選ばれるなどの功績を讃えて生家跡に建てられたのが、三岸節子記念美術館です。常設展や年に数回催される特別展では、節子にちなんだ近現代の作品を中心に楽しめます。美術館が位置するのはかつて織物工場が軒を連ねた地域の一角。「あいちNAUプロジェクト」は、時代の変化とともに影を潜めた機業を伝統産業という切り口から紹介する好機になりました。



photo by Yuka Yamagishi

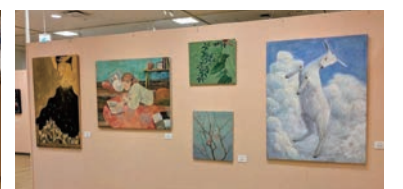
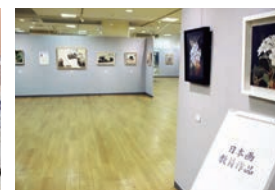
林規章 グラフィックデザイン展 "SUBSTANCE"

10月12日〜28日まで、本学相模原キャンパスにあるJoshii Space 1900にて「林規章 グラフィックデザイン展 "SUBSTANCE"」を開催。本展は、本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻教授の林規章先生がデザインした本学イメージポスターが「TDC賞」と「JAGDA賞」をW受賞したことを記念し開催されました。会場には、受賞作品やアイデアの元となる数多くのスケッチが展示されたほか、同じデザインを和紙にシルクスクリーンを施したものやデジタルプリントし大判ポスターにしたものを配置することで、それぞれの表現から伝わる独特な風合いを感じることができるよう工夫が凝らされており、またスペース奥には Joshi Space 1900 の高い天井空間を活かした特大ポスターがそびえ、学内外から訪れた来場者を魅了しました。



神戸阪急にて 「大解剖 女子美術大学日本画展」を開催

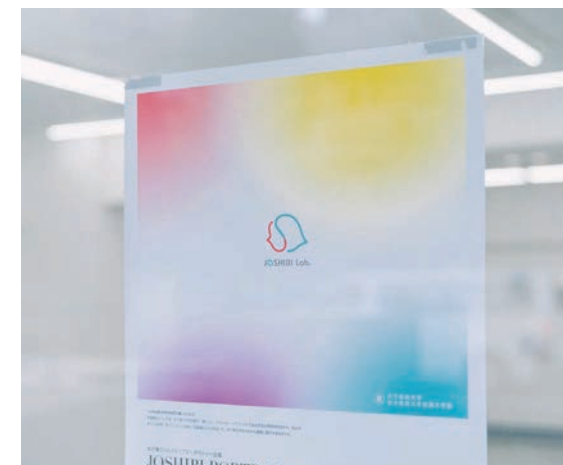
10月5日〜10日まで6日間、神戸阪急の本館9階催場にて「大解剖 女子美術大学日本画展」が開催されました。本学芸術学部美術学科日本画専攻の非常勤講師を含む教員、卒業生および在学生あわせて総勢40名96点の日本画作品が一堂に展示されました。展示のほかに、本学の歴史や日本画専攻の特徴的な取り組み（日本画素材研究、古典研究）を紹介するコーナーを設けるとともに、実際に日本画素材に触れることができるワークショップを実施し、多くの来場者が展示や体験を通して日本画の魅力を存分に堪能できる展覧会となりました。





客員教授 假屋崎省吾先生 特別講義 開催

本学短期大学部客員教授であり華道家の假屋崎省吾先生による特別講義が、5月27日に杉並キャンパスにて開催されました。まず初めにいけばなのパフォーマンスが行われ、シャープな印象の花器を使用し、花材には青紅葉と鮮やかなピンクの芍薬を使い、存在感と迫力のある作品を完成させました。その後スライドを使用した説明では假屋崎先生の幼少期からアーティストとして活躍する現在までの道のりについてお話しいただいたほか、これまで制作された作品の紹介として、いけばなの作品や企画展、個展やショールームのショップデザインなどを、当時の写真とともに幅広くご紹介いただきました。最後の質疑応答の時間では、学生からの質問が多く寄せられ、先生の近くまで行き笑顔で答える姿がとても印象的でした。2年ぶりに対面での開催となった本講義。在学生や教員、多くの聴講者が集まり最後は大きな拍手とともに特別講義は幕を下ろしました。



女子美クリエイティブ・ラボラトリー企画 「JOSHIBI PORTRAITS」

会期

1期 2022年 9月12日(月) - 9月30日(金)
2期 2022年10月12日(水) - 11月4日(金)
3期 2022年11月15日(火) - 12月2日(金)
4期 2023年 1月17日(火) - 2月3日(金)



女子美クリエイティブ・ラボラトリーについて

女子美術大学は建学以来、へ女性のための「美大」として、女性が美術教育を受ける機会を造成し、美術による女性の自己実現を支援してきました。そして今、これほど多様性が重視される社会が到来した時代に、女子美にはどのような役割が求められているのでしょうか？ 女子美はこうした問いを社会とともに考えるプラットフォームとして、女子美クリエイティブ・ラボラトリー、通称「女子美ラボ」を創設します。2023年度から本格始動する女子美ラボですが、2022年度はパイロット事業として青梅街道沿いに新設したスペースをベースに様々な企画を行います。

本学杉並キャンパス近くの青梅街道沿いに新設したスペースにて、女子美クリエイティブ・ラボラトリー企画「JOSHIBI PORTRAITS」を開催。この展覧会シリーズは、女子美ラボの活動の一環として、クリエイター・アーティストである学生の現時点の自分や、自分が見ている世界、考えていることを語る「自画像としての作品」を、在学生の中から募集し、41名の学生が4期に分かれて展示中です。



井手元 咲良『庭覧』

第57回 神奈川県美術展にて、 本学学生が平面立体部門にて大賞を受賞、ほか7名が入賞

9月17日の午前中には、審査員長を務めた本学美術学科洋画専攻教授である清水美三子先生と、美術評論家である沢山遼さんによる、平面立体部門の講評会「ギャラリートーク」を開催。受賞者本人にも解説いただきました。審査の際は作品の説明や作者の性別、年齢なども非公表のため、今回のギャラリートークを通して、作家による制作の意図が明かされました。審査員による着眼点と照らし合わせ、作家本人と意見を交わす大変有意義な講評会となりました。

午後には授賞式が行われ、本学修了・在学生8名に表彰状が授与されました。大賞を受賞した井手元さんは、今回の受賞を大変嬉しく思い、これからの制作に励みたいとコメントを述べました。

神奈川県美術展は、新進作家の育成と美術愛好家の創作活動の発表の場として、1965年から続く県下最大規模の公募美術展です。今回は全国から応募された1084作品の中から342作品が入選し、そのうち平面立体部門の入賞作品5点、工芸部門の入賞作品3点が本学学生による作品という功績を挙げました。

【平面立体部門】 入賞12作品中5作品 本学学生

■大賞

井手元 咲良『庭覧』
大学院美術研究科博士前期課程
美術専攻 洋画研究領域 在学

■準大賞

YU XIAOKAI『Perfect Lovers』
大学院美術研究科博士前期課程
美術専攻 洋画研究領域 在学

■坂本 優恵

「通りすがり」
芸術学部 美術学科 洋画専攻 在学

■美術奨学会記念賞

太田 絵理「綺麗になつてどうするの？」
大学院美術研究科博士前期課程
美術専攻 版画研究領域 修了

■マツダ賞

伊藤 夏実「フール」
大学院美術研究科博士後期課程
美術専攻 美術研究領域 在学

【工芸部門】 入賞10作品中3作品 本学学生

■かながわ賞

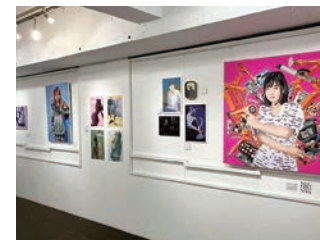
森 寛恵「小宇宙」
芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻 在学

姜 懿山「蘭 #5」
大学院美術研究科博士前期課程
美術専攻 工芸研究領域 在学

■美術奨学会記念賞

原田 向日葵「入浴中」
芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻 在学

入賞作品の画像はこちらよりご覧いただけます。 https://www.kanagawa-kenbiten.com/winning_57.html ▷



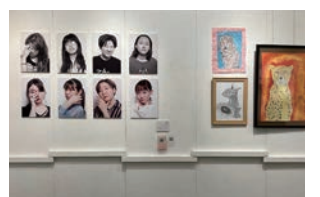
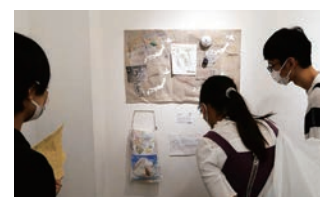
「女子力【じょしりき】展」2022

9月2日から4日までの3日間、「女子力【じょしりき】展」がデザインフェスタギャラリー原宿にて行われました。

女子力展とは、女子美生が持つ「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」をテーマに、杉並キャンパスと相模原キャンパスの両校地の学生が原宿のデザインフェスタギャラリーに集結し、それぞれの思いを込めた作品を披露することのできるイベントです。今年も新型コロナウイルス感染予防対策を講じた上で開催されました。

5度目の開催となった今年は、およそ210の団体が参加し、油絵や日本画の絵画作品から模型やフェルトといった立体作品の展示、オリジナルのイラストやアクセサリー販売、オークション展示販売など多岐に渡る女子美生の作品が会場を埋め尽くしました。

女子美生が持つ多種多様な「女子力（じょしりき）」によって生み出されるリアルな「女子美ワールド」で多くの来場者を魅了しました。

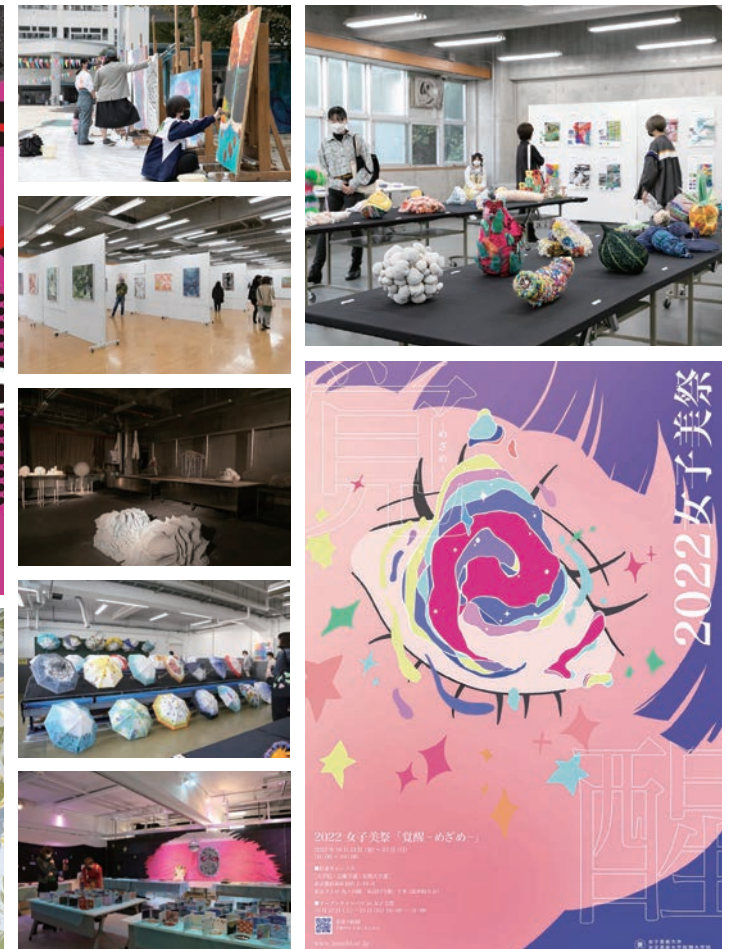




10月22日に相模原キャンパスにて芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻客員教授の奥村 靉正先生による特別講義が開催されました。本講義に参加する学生はテーマに沿った課題を制作し、奥村先生に講評いただきました。

奥村 靉正客員教授 特別講義開催

スター、展示の背景にまで展開させた杉村愛実さんの作品が奥村 靉正賞を受賞。合わせて反戦のメッセージを伝えるヘインズ利彩さんのポスター作品と、現地のウクライナの方と実際に連絡を取り、SNS上の戦前の日常の写真を描写した邑橋倫子さんの作品が特別講義2022賞を受賞しました。学生たちは新たな表現に挑み、奥村先生から直接講評いただいたことで、今後の制作にも繋がる貴重な経験を得ました。

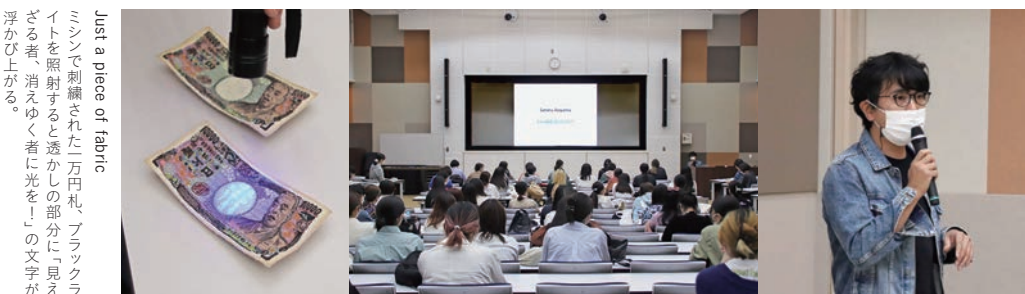


3年ぶりに「女子美祭」が来場型で開催！

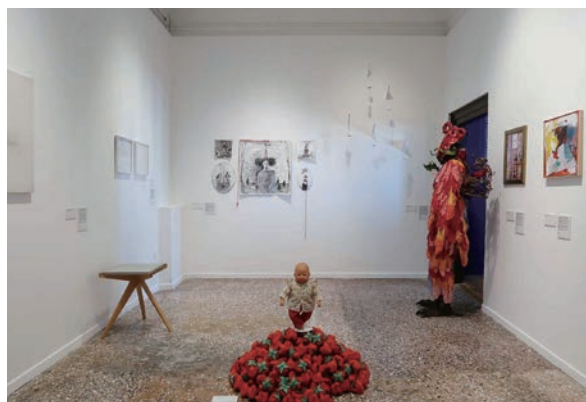
10月21日～23日の3日間、杉並・相模原両キャンパスにて『2022女子美祭』が開催されました。杉並キャンパスは「覚醒〜めざめ〜」、相模原キャンパスは「百鬼夜行」をテーマに在学生の作品展示、自主展示、ステージ発表、有志によるハンドメイドのグッズ販売を行いました。また、卒業生が手掛けたキャラクターが多く描かれているサンリオオカフェワゴンによる軽食販売を実施。卒業生である奥村心雪さんが手掛けたキャラクター「シナモロール」も杉並キャンパスに遊びにきてくれました。ゲスト講演会では杉並キャンパスに俳優の後藤大さん、井澤巧麻さんが来校。相模原キャンパスでは空気階段さん、オフローズさんによるお笑いライブ、声優の増田俊樹さんによるトークショーが開催され、好評を博しました。新型コロナウイルス感染症の予防対策により今回は来場者を関係者のみに制限しましたが、3年ぶりとなる来場型で久々にキャンパスが活気に満ち溢れました。

芸術家である青山悟さん 特別講義開催

工業用ミシンを用いた作品制作をされている芸術家の青山悟さんによる特別講義「ミシンと言語 コロナ禍のアーティスト活動について」が10月21日に工芸専攻主催で相模原キャンパスにて開催されました。青山さんが海外でミシンやフェミニズムを学んだ経緯から始まり、アーティストとして労働により苦しんでいる人たちが、見えない場所で消費されている、まう人たちに光を当てることについて、作品画像をスライドに投影しつつ講説。また、新型コロナウイルスによって変容していった「日常」をテーマにした刺繍作品をオンラインで展示・販売するプロジェクト「Everyday Art Market」や、一万円札を原寸大で細密に刺繍し、制作時間を時給に換算することでアートや労働の対価を問う作品「Just a piece of fabric」を交えながら、コロナ禍における制作の変化をお話しいただきました。質疑応答では、学生から手仕事の価値を伝える術や、情報の取捨選択の仕方など、多くの質問が寄せられ、大変意義深い講義となりました。



Just a piece of fabric
ミシンで刺繍された一万円札。ブラックライトを照射すると透かしの部分に「見える者、消えゆく者に光を！」の文字が浮かび上がる。



03 | ベネチアで女子美とヨーロッパをつなぐ展覧会を開催

8月24日～29日にイタリアのベネチアで女子美とヨーロッパを繋ぐ大村文子基金バリ賞、ミラノ賞、ベルリン賞の受賞者で現在もヨーロッパを拠点に活動している卒業生の展覧会が開催されました。フランス、イタリア、ドイツなどからドローイングやインスタレーションなど様々なカテゴリーの13点の個性豊かな作品が出展され、会期中2200人の来場者で連日賑わいました。ベネチアビエンナーレで世界中から美術関係者もベネチアを訪れている中、イタリアのみならず多くの国の来場者から、他の都市でも本展覧会を開催してほしいなど高い評価を得ました。会場には女子美の歴史などを紹介するコー

ナーも設けられ、多くの来場者にパネル展示や映像で女子美を深く知ってもらう機会となりました。女子美の創始や歴史的背景に多くの人から共感する声や、作品への好評や興味の声が多く寄せられました。また、大村智名誉理事長によって2000年に創設された「100周年記念大村文子基金」により女子美の卒業生がヨーロッパで活躍する機会となり、女子美とヨーロッパを繋ぐ大きな架け橋になったことが実感される展覧会にもなりました。期間中にはミラノ研修でイタリアを訪れた在学生と展覧会に出品した卒業生との交流会も開催され、このことをきっかけとして次世代に向けた次の新しいチャレンジが期待されます。



01 |

愛媛県新居浜市
「あかがねミュージアム」にて
本学学生との
連携プロジェクト作品が上映



ヒーリング表現領域3年
山本里奈「みかんばけのだいぼうけん」

本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域とヒーリング表現領域の3年生が、愛媛県新居浜市にある総合文化施設「あかがねミュージアム」で開催される夏のイベント「おひるねびじゅつかん」で上映する子ども向けの映像作品を制作しました。本イベントのコンセプトは、ハンモックやクッションに寝そべて、絵本を読んだり、おもちゃで遊んだり、映像を眺めたり、いつもと違う美術館を体験することです。参加した学生たちは地域の特性を調査するところからスタートし、オリジナルのキャラクターとイラストに動きを付けて、子どもから大人まで楽しんでもらえるアニメーションを目指して制作しました。

NEWS — & — TOPICS



02 | バンドン工科大学と 学術交流協定を締結・プロジェクトを開始

このたび本学は、インドネシアのバンドン工科大学と学術交流協定を締結しました。同大学はインドネシア理工系大学の名門であり、同国初の芸術・デザインの高等教育機関として、研究・科学技術・芸術の発展に大きく貢献している大学です。6月23日には本学杉並キャンパスにて、駐日インドネシア共和国特命全権大使立ち合いのもと、

美術デザイン学部との協定締結調印式を執り行いました。また、テキスタイル分野での連携プロジェクトを開始し、第一弾として同大学のビンタン・ティティサリ講師と本学の山村美紀教授・竹中明子准教授の間での交換授業を行い、本学の学生はパティック染めを、バンドンの学生は筒描き染めをそれぞれの教員から学びました。



07 | 第24回グラフィック「I_WALL」グランプリ受賞者個展 佐川梢恵、森野真琴展 開催

本学ヴィジュアルデザイン専攻卒業生で、2019年度の本学DMのイラストを担当した佐川梢恵さんは第24回グラフィック「I_WALL」グランプリを受賞しました。これに伴い、9月21日から10月22日に『佐川梢恵、森野真琴展「明日天国を離れるーI leave heaven tomorrow」』をガーディアン・ガーデンにて開催。前回のグループ展に続き、佐川梢恵と架空の人物である森野真琴による「コミュニケーションとは何か」をテーマに展示。会場中央には『森野真琴』の象徴となる大きな木箱、

その箱に視線を向けるように描かれたキャラクターが展示されました。また、佐川さんは毎日に廊し、布団で寝る、合図が聞こえると起床し水を口に含む、髪を梳かす、掃除などを行い再び眠るといった行動を繰り返すことで、自身の“天国”を体現。キーワードとなる「執着」や「反復」も会場の随所に表現されました。絵の展示を新たな表現へと昇華させた佐川さんの試みは、盛況のうちに幕を下ろしました。

08 | Maker Faire Tokyo 2022 に 本学から2ブースが出展

個人・企業を問わずモノづくりの好きな人たちが集まる大型イベント「Maker Faire Tokyo2022」に、本学からロボット研究プロジェクトとファッションテキスタイル表現領域の2ブースが出展しました。ロボット研究プロジェクトのブースでは「かわいいロボット」をテーマに企業と連携し企画制作したロボットの展示を行いました。ファッションテキスタイル表現領域のブースでは「未来にあったらいいな」をテーマにプログラミングと、暮らしに親和性の高い布やマテリアルを使用し制作した電子クラフト作品の発表を行いました。また、特設ステージではファッションテキスタイル表現領域教授である山村美紀先生が登壇し、ユカイ工学(株)代表取締役であり武蔵野美術大学教授の青木俊介さん、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授の小林茂さんと「Maker Faireと美術系大学」をテーマにセッションを行いました。



05 | 慶應義塾大学SFC研究所 健康情報コンソーシアムとの 協働制作ゲーム 『ユウワクバスターズ』の WEBサイトが公開



本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域の学生と慶應義塾大学SFC研究所 健康情報コンソーシアムが協働して制作したゲーム『ユウワクバスターズ』のWEBサイトが公開されました。このゲームは、医師らで結成された有志専門家応援チーム「ユウバス応援団」の指導・監修のもと開発したシリアスゲーム（社会問題の解決を目的とするゲーム）で、若者のwell-being力をあげる（身体的・精神的・社会的に良好な状態）を目的としています。さらにこのゲームは、evidence（裏付け）、education（教育）、entertainment（楽しさ）という3つの「e」の要素があるソサエティ5.0の健康教育ツールでもあり、日本初・大学発「3eヘルスクリエーション（3eヘルスク）」ゲームとして、慶應義塾大学SFC研究所 健康情報コンソーシアムを拠点に、学校や職域教育分野へ紹介されました。

06 | 相模大野ステーションスクエア ハロウィン・クリスマス装飾

9月16日～10月31日に設置された「相模大野ステーションスクエアハロウィン装飾2022」ののコンセプト立案からデザイン、一部分の装飾制作を、本学デザイン・工芸学科環境デザイン専攻の有志3年生が手掛けました。毎年恒例の相模大野ステーションスクエアにより開催されるアトリウム広場のハロウィン装飾。本イベントと本学のコラボレーションは初の実施です。今回は「おばけとティーパーティ」をテーマに作成。テーブルの下に潜れる仕掛けやフォトスポットを設け、装飾には事前に開催された「ハロウィンおばけを作るワークショップ」で地域の子どもたちが作った「おばけ」をあしらうなど、地域の方が楽しめるよう工夫が施されています。会場に設置されている大型サイネージでは学生が制作した装飾の紹介動画が放映されました。また、12月14日からは相模原市南区との共同イベントであるクリスマスの装飾を、引き続き同専攻の学生が手がけました。



04 | 関口宏美さん作「まよなかのおふろさん」が 第23回ピンポイント絵本コンペで優秀賞を受賞



本学アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域4年生関口宏美さん作の絵本「まよなかのおふろさん」が、第23回ピンポイント絵本コンペで優秀賞を受賞しました。ピンポイント絵本コンペとは、2000年より絵本作家育成を目的としてはじまったギャラリー主催の絵本公募展です。プロ・アマ問わず、オリジナル、未発表の絵本作品を募集しており、これまでに刊行された受賞作は17作。関口さんは真夜中を舞台に、四角いお風呂が主人公のお話を深くやわらかい青で表現しました。



11 | 女子美 アーティスト・イン・レジデンス

本学では2022年度より、学生の国際的なキャリア支援の観点から「女子美アーティスト・イン・レジデンス」を開始しました。7～8月の招聘アーティストとして、2019年スペイン・バスク自治政府の若手アーティスト支援プログラム『Ertibil Bizkaia』の受賞者であるナタリア・スアレズさんをスペイン・バスクからお迎えし、本学アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域の学生企画によるアーティストトークや、

オープンスタジオを開催しました。10～12月は招聘アーティストとして、インドネシアからイネス・スカントさんと本間メイさん（本学卒業生）を招待し、イネスさんからはジェンダーとアイデンティティに関するワークショップの提供や、立体アート専攻学生への作品講評を行っていただきました。12月にはお二人のオープンスタジオとともにアーティストトークも実施しました。



12 | NEW ENERGYに 『ジョシビ・タンダイ』と『丹後×女子美』が展覧

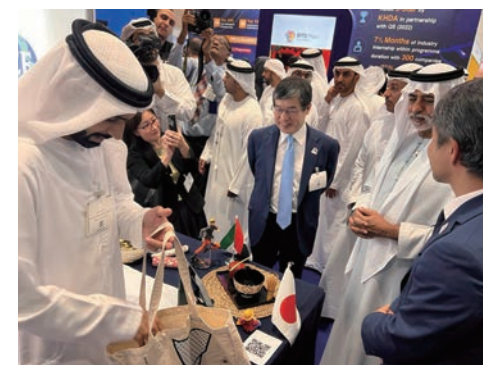
展示会、マーケット、メディアを内包したクリエイションフェスティバル「NEW ENERGY」が新宿住友ビル三角広場に開催され、本学短期大学部から『ジョシビ・タンダイ』と『丹後×女子美』の2団体が出展しました。『ジョシビ・タンダイ』では、短期大学部デザインコーステキスト

イル2年生が、日本各地で育まれている個性豊かな繊維文化の魅力を詰め込んだテキスタイルを制作し、風呂敷やエコバッグに展開。『丹後×女子美』では、短期大学部専攻科の学生が、300年以上の歴史を持つ丹後ちりめんの端材を使って、アート作品やバッグを制作しました。

09 |

「NAJAH Exhibition 2022」に参加

10月16日～18日の3日間、アラブ首長国連邦（UAE）の首都アブダビにて、教育・進学フェア「NAJAH Exhibition 2022」が開催され、本学は6回目の参加となりました。本フェアには、アメリカ、カナダ、マレーシア、ヨーロッパ各国の高等教育機関が出展し、日本からは本学を含め5大学が対面で参加しました。現地学生の日本留学促進を目的に、日本の文化や大学教育の特徴、魅力を発信。特に本学は参加校唯一の美術大学のため注目度は高く、アニメや漫画、デザインに関心を持つ来場者で会場は賑わいました。会期中UAEのムバラク寛容・共存担当大臣に本学卒業生がデザインした伝統工芸品を贈呈。女子美の特色を知っていただく良い機会となりました。



10 | ICAF2022 国立新美術館とオンライン併用で開催

2002年にはじまり、今年で20回目を迎える学生アニメーションの祭典「インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル（ICAF）2022」が、9月29日～10月2日に国立新美術館とオンライン併用で開催されました。今年には本学を含め全国から30の学校が参加。オンライン併用によって地方の学校からの参加も増え、未来志向の新しい開催方法

となり、各校の教員によって推薦された学生のアニメーション211作品が上映されました。本学からは、芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域の学生作品12本が出品され、2022年3月卒業の西郡優喜子さんの「あじをみさせて」が観客賞1位を受賞しました。

深沢紅子 野の花美術館

『深沢紅子と甲斐仁代 友情絵画展』

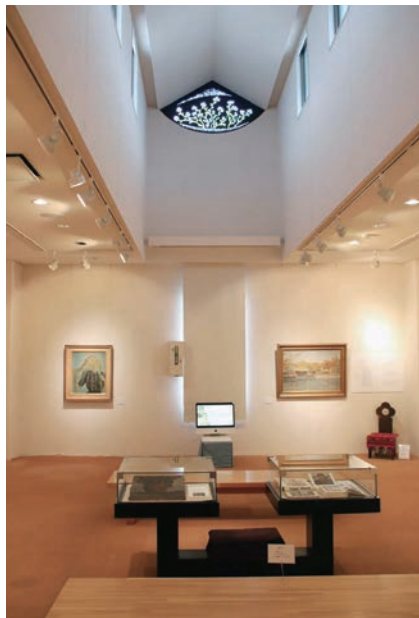
岩手県盛岡市の中心を流れる中津川河畔に佇む「深沢紅子 野の花美術館」。本学卒業生で女流画家の先駆けとなった深沢紅子さんの故郷にあるこの美術館では、年4回の作品入れ替えを行いながら、様々な企画展を開催しています。

今回、8月27日～12月7日に本学歴史資料室協力のもと、同じく本学卒業生で紅子さんと深い交流をもち、大正・昭和の激動の時代をともに生き抜いた甲斐仁代さんとの画業を辿る展覧会が開催されました。

タイトルにノスタルジックな印象を受けるこの企画展ですが、時代を経ても変わることのない、普遍の心のつながりがテーマとなっています。仁代さんの作品展示は、岩手では初。2人の出会いは、女子美術学校（現：女子美術大学）に入学した1919年まで遡ります。

本郷菊坂町（現：文京区本郷）にある、当時の先進的で女性に開かれた女子美術学校の日本画科（現：日本画専攻）に入学した紅子さんですが、親しい友人と訪れた知人宅に飾られているゴッホのひまわりを間近で見て大きな衝撃を受け、油絵の基礎習得を熱望。翌年、西洋画科（現：洋画専攻）へ転科しました。その感動を共にした友人が、西洋画科に在籍していた仁代さんでした。同じ学び舎で励みあった2人は、岡田三郎助という良き師との出会いによって、同時代の女性たちと切磋琢磨しながら、婦人洋画家協会や婦人美術協会・三人社等、様々なグループを組んで精力的に制作し活動しました。絵を描くに男性も女性もない、平等に評価されて当たり前の時代をつくった代表的な2人です。

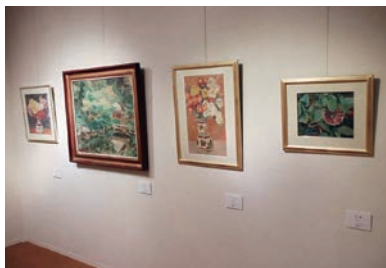
スタンドグラスが美しい展示室には、時代を開いた女性達の熱気が溢れていました。



忘れな草のスタンドグラスがある3階展示室



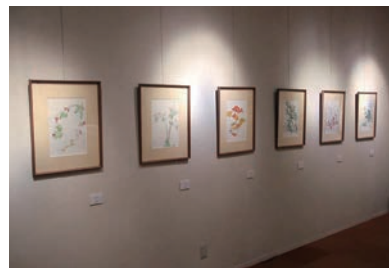
三人社の展覧会場にて（左から深沢紅子、橋本花、甲斐仁代）



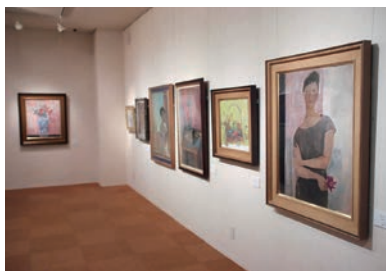
甲斐仁代さんの作品



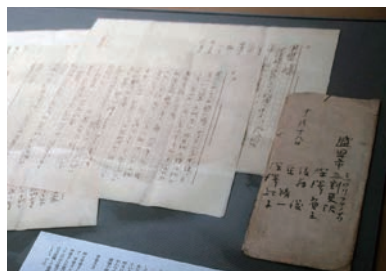
仁代さん没後、紅子さんによる仁代さんの絵の鑑定



紅子さんの晩年のライフワークとなった野の花スケッチ作品



深沢紅子さんの作品



ふるさと岩手に疎開した時代、
紅子さんが親しい友人らと仁代さんへと宛てた手紙



会場でひときわ目を引く甲斐仁代さんの作品
「静物」・油彩・1956年



アップサイクルデザインプロジェクト

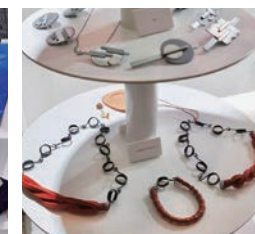
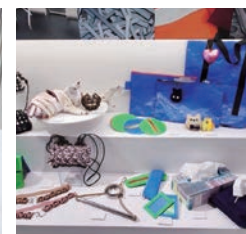
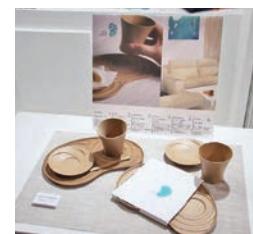
～工業廃材を使って新たな価値を創造する～

女子美術大学では、サービスラーニングという通常の授業課題とは異なる実践的な学びの場を設けています。今年度複数設定された課題の中で、10年越しで取り組んでいる「アップサイクルデザイン」をサービスラーニングとして大学全体の1年生、2年生に向けて募集し、全ての学科から15名が参加しました。

夏休み期間中に活動し、導入としてアップサイクルとは何かという講座を受講の上、ロッキー化成様のご協力による樹脂成形ワークショップを体験。また、横浜市内にある金属加工メーカー、山星製作所様のご協力で工場見学をさせていただき、モノを製造する過程で廃材が生まれることを学びました。そのほか、神奈川デザイン機構様には神奈川県横浜市都筑区に所在する複数のものづくり企業からの多様な工業廃材をコーディネートいただき、また、千葉県の板金加工企業 親和

様、服飾資材を製造販売されるクロップオザキ様、大阪に本社を構える錦城護護様、愛知県名古屋市の林スプリング様のご協力により、金属・樹脂・ゴム・布・ボタン・ファスナーなど多種多様な工業廃材をご提供いただくなど、豊富な素材を使用して作品制作に取り組みました。授業の最終日には、全てのご協力企業様にご参加いただき、プレゼンテーションを実施。複数の素材をミックスし、生活に潤いをもたらす雑貨やアクセサリー、アート作品など50点以上の作品を制作しました。ご協力企業の皆様からは、「自社では廃材になる部品などが、こんなに見違えるような素敵な作品に生まれ変わることに感動した」など、高い評価をいただきました。

作品は、12月7日～9日に東京ビックサイトで開催の「エコプロ展」に出展し、多くの来場者の方々にご覧いただきました。



JAM

女子美術大学美術館コレクション－JAMのABC展－

2022.5.18(水)－7.2(土)

アルファベットをきっかけに、展示作品の見どころや鑑賞のヒント(問いかけ)などを提示し作品を鑑賞する展覧会を開催しました。

「柚木沙弥郎の100年－創造の軌跡－」展

2022.9.17(土)－10.17(月) *会期中無休

女子美術大学元学長で名誉教授の柚木沙弥郎の「創作」と、女子美工芸において展開された「教育」にフォーカスをあて、100歳となる柚木作品の魅力を紹介する展覧会を開催しました。

女子美ギャラリーニケ

ニケキュレーターズセレクション#06
東 麻奈美－ポルターガイスト／回転－

2022.5.17(火)－6.20(月)

本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。
本年は、東麻奈美の作品を紹介しました。

女子美術大学美術館コレクション－アーティストの姿－

2022.10.28(金)－11.18(金) *10月21日(金)～23日(日) 特別開廊

歴史資料展示室

菊坂の女子美
－戦災により焼失した本郷菊坂校舎時代をふりかえる－

2022.4.5(火)－7.16(土)

第42回 造形「さがみ風っ子展」

2022.10.21(金)－10.23(日)

相模原市内小中学生の造形作品展を開催しました。

女子美染織コレクション展 Part 10

きもの－江戸から明治の装い－

2022.11.9(水)－12.10(土)

第10回を迎えた女子美染織コレクション展では、江戸時代から明治時代のきもの着装に視点をあて展示。化粧道具や装飾品など約160点を展覧しました。

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2022」展

2022.7.8(金)－7.25(月) *7月18日(月・祝) 特別開廊

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した18講座の学生作品を展示しました。

女子美術大学美術館コレクションの中から、かつて女子美で教鞭をとり、学生指導の傍らアーティストとして活躍された本学教員の作品を紹介する展覧会を開催しました。

JAM

2022年度 女子美術大学退職教員記念展

2023.1.11(水)－1.26(木)

2022年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2022年度 女子美術大学大学院
博士後期課程研究作品発表会

2023.2.13(月)－2.18(土) *開催は学位の申請状況により変更があります。

2022年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2023.3.10(金)－3.15(水) *会期中無休 2022年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

女子美ギャラリーニケ

2022年度 女子美術大学退職教員記念展

2022.11.29(火)－12.17(土)

2022年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2022

2023.1.13(金)－1.24(火)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作の作品を紹介します。

2022年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2023.3.10(金)－3.15(水) *会期中無休 2022年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

歴史資料展示室

2022年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み 女子美生らいふ！

2022.9.12(月)－2023.3.17(金) *休室日 火・日・祝日、年末年始(12月27日～1月10日)

1900年代～1945年頃の女子美生の生活を収蔵資料とともに、当時のエピソードを交えながら紹介します。

JAM 女子美アートミュージアム展覧会情報

女子美術大学
美術館コレクション
－JAMのABC展－

2022.5.18(水)－7.2(土)

相模原 女子美アートミュージアム



JAMのABC展－鑑賞のプラクティス－は、展覧会を作品の時代やジャンルでくくるのではなく、作品の見どころや鑑賞のヒント(問いかけ)などをアルファベットに関連づけて構成し、主題や物語、描き方、形の面白さなどを提示しながら鑑賞する展覧会です。本学出身の作家や、ゆかりの作家を中心に所蔵している女子美術大

学美術館コレクションの中から29点の作品が選ばれ、新たな目をむけてもらうきっかけとなりました。会期中、「JAMのカタチカード」も配布。関連プログラムとして本学洋画専攻1年生有志の学生によるファミリーワークショップも開催され、いつもとひと味違う視点から鑑賞を楽しむ機会となりました。

JAM 展覧会報告 PICK UP 02

女子美染織コレクション展
Part 10 きもの
－江戸から明治の装い－

2022.11.9(水)－12.10(土)

相模原 女子美アートミュージアム

本展は、江戸時代から明治時代の着装に焦点をあてた展覧会。「着装」は、人が衣服を纏(まと)うことで生まれる「形」です。西洋の衣服は個々の纏い方を厳格に定め、その組み合わせで成立します。他方、日本のきものは、現存する資料単体では着装の姿は簡単に想像できません。それほど、自由度が高い服飾文化なのです。会場では、江戸時代から明治時代のきものの様式と着装

の変遷を実物資料とイラストで視覚的に展開し、着装されたボディの展示も行うとともに、横井玉子考案の女子改良服の復元、本学大学院において修復された明治時代のきもの、化粧道具や帯、帯留などの装飾品を含めて、多角的に当該時期の服飾文化を紹介しました。朝に形作られ夕には失うことを繰り返す、儚さを宿命づけられた日本固有の美を堪能いただきました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 佐藤真澄・松山智一
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社ヒーローズ
発行日 2022年12月23日
© 2022 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方は、お送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <https://www.joshi.ac.jp>